

## 拝啓「営業という仕事」様

「私からすれば、あなたという仕事ばかりをしたからといって、いわゆる芸が汚れてしまうのであれば、最初から才能がないということです。センスがないということですよ。」

この業界では、あなたに対しての考え方はいっぱいあります。

テレビとかメディアから離れているあなたをとにかくメジャーではない仕事のように捉える傾向がまずあります。あなたという仕事を目先の金に走っているように捉える傾向も場合によってはあります。我々お笑いの世界では、あなたのような仕事ばかりをしていると「芸が汚れる」と考え、そういうことを実際に口にして言う人もいます。そのすべてが当たっているかといえれば、残念ながら当たっているとところが確かにあります。しかし、その考え方すべてが「絶対」かと言えば、それは「？」マークがつくと私は思っています。

要はあなたという仕事をする人間の心の持ち方ひとつだと私は考えています。そして、特にですが、あなたのような仕事ばかりをしていると「芸が汚れる」ということに関して、率直に言わせてもらえば、こと私に関しては、あなたという仕事からそれこそ多くを学びこそすれ、あなたという仕事ばかりをしたからといって「芸が汚れた」とは、これっぽっちも思っておりません。そして、それは実際にもうでしょう。それよりも、あなたという仕事をすることによって、私はお笑い芸人としての力をずいぶんつけさせてもらったと思っています。

す。

私のデビューしてからの二八年間を振り返っても、いろんな仕事をしてきましたが、笑い話のように思い出せるのは、ほとんどあなたという仕事ばかりです。そして、そのほとんどが仕事場としてはとてもないシチュエーションだったりするのです。そのとんでもないシチュエーションというのは、実際にそのときは戸惑ったり、困ったりしているのですが、あとにこうして笑えるというのは、それを楽しんでいたところも、少なからず私自身の中にあっただけでしょう。そして私が力をつけさせてもらったというのは、そういう私の場合なら「人を笑わす」という作業において限りなく条件や状況の悪いところで、それでもなんとかして「笑わしてやろう」とした私の努力や挑戦や試行錯誤が、理屈ではなく体で、いろんなことを私に身につけさせ、いろんなことを教えてくれたということです。

人によっては、そういう状況では自分のいいところが出せないとか、お笑いでいえばウケないとか言ったりする人もいます。しかし、私からすれば、それは逃げです。特にお笑いの場合は、どんなところでも・・・というものが必ず要求されます。そして、実際それがその人の力になっていくのです。そういう意味では、ハコというものを持たない東京の芸人はどんどんあなたという仕事をやるべきだと私は思っているぐらいです。

私からすれば、あなたのような仕事ばかりをしていると「芸が汚れ

る」というのは、何をもって言っているのか本当のところは実はよく分かってない部分があります。「芸が汚れる」というのは、正確には「心が汚れる」ことを言っているので、「心が汚れる」というのは別にあなたという仕事に限らず、メジャーな仕事をしていてもその人の心の持ち方ひとつで汚れてしまうわけです。現に私はそんな奴を何人も見てきました。

それこそ、そういうのは、その人それぞれの芸に対する生き方とか考え方とか、そういう部分の問題であって、そのへんが分かっていたらば絶対汚れません。そのへんがわかっていないければ、要するに何をやっても汚れていくということです。基本的には、あなたという仕事に限らず、芸能界という世界そのものが、心の持ち方によってはとてもなくその人間を汚してしまう要素を含んでいます。私からすれば、あなたという仕事ばかりをしたからといって、いわゆる「芸が汚れてしまう」というのであれば、最初から才能がないということです。センスがないということです。この世界を本質的に見る目がないという事です。

だから私は、あなたに対して悪い印象はこれっぽっちも持っていない。それよりも、「すばらしい思い出よ、ありがとう」と言いたいくらいです。何干こなしたかわからない、あなたという仕事の中の一つ一つの思い出が、お笑い芸人としての私を、なぜか自己満足させてくれるひとつの、オーバーな言い方をすれば「勲章」のように思えて

しまうぐらいです。

どこの県のどこの町とか、そういうことはいっさい忘れてしまいました。が、今でもときどき思い出しては一人で笑ってしまう仕事に、あの町の国道沿いのガソリンスタンドのオープニングイベントの仕事がありました。我々の漫才をやるステージが、そのガソリンスタンドのいちばん邪魔にならない端のほうに用意されていて、たしか、その後ろは広々とした田んぼだったと思います。とにかく、その国道とガソリンスタンドと、あと、周りにはその広々とした田んぼだけで、民家らしきものもまったくなく、お客さんというものが根本的に集まるのかと心配していたのですが、案の定私たちのその嫌な予感通り、一回目のステージのときに集まったお客さんの数は一五、六人。そのほとんどがその従業員で、純粋なお客さんはどこから来たのか知りませんが三、四人だったと思います。しかも、私たちがステージをやっている最中にトラックが大きな音を立ててそのガソリンスタンドにガソリンを入れにきたりするんです。そして、そのたびに従業員が「いらっしやいませ」と、そのトラックのほうに走っていったりするので。

はっきり言って、ステージになりません。一回目のステージは、漫才をやるといふより思いきりその状況をぐちり突っ込んで終えたよいうな気がします。そして、二回目のステージのとき、このままではダメだと思い、お店のオーナーに話して我々もそのガソリンスタンド

でステージの時間の分だけ働かせてもらうことにしました。従業員さんと同じように、ガソリンを入れにきた車にガソリンを入れ、窓を拭き、灰皿の吸い殻を捨て、最後にスズを振りながら「ありがとうございますございました、ありがとうございます」と送り出してやるのです。そして、その姿をステージとして数少ない純粋なお客さんに見せてやるのです。実に面白かったです。そして、実によくウケました。お店のオーナーにもすごく喜んでもらったのを覚えています。

それから、これもまた私にとって忘れられない仕事のひとつなのですが、夏の暑いさかりに流れるプールでの仕事がありました。流れるプールの真ん中によくある、みんなが体を焼いたり休んだりする場所で漫才をやるのです。司会者の呼び込みで私たちが登場し、四、五人のスタッフに支えられて、ゴムボートに乗ってその漫才をやる場所まで行くのですが、何せプールが流れているわけですから、なかなかその場所にたどり着くことができません。結局、私たちもマヌケな顔をして、お客さんと一緒にプールを一周回ったと思います。そして、やっとのことですごにたどり着き、漫才を始めたのですが、流れるプールですから、当たり前の話ですが、お客さんが私たちの目の前を流れていってしまうのです。私たちが前フリをして、オチを言った頃にはもう、目の前のお客さんが違うのです。前フリを聞いていないお客さんがオチだけ聞いても笑えません。ハトが豆鉄砲くらったような顔をしています。笑っちゃいました。最後には我々も開き

直り、一人だけのお客さんにターゲットをしぼって、みんなでギターとスズを持って、ぐるぐる回りながら漫才をやったのを覚えていません。

これもまた忘れられない仕事なのですが、居酒屋での仕事がありました。それこそ普通の居酒屋のそのお店の座敷でステージをやるのです。私たちの目の前というより足元で、お客さんが鍋をつついているのです。漫才をやりながらも、それが気になってしょうがありません。思わず「豆腐、食べられるよ」とか「春菊、そんなに煮ちゃダメだよ」とか注意しながらステージをやったのを覚えています。

夕張のスナックの仕事は、もう底抜けのものでした。カウンターだけのお店で、お客さんが七、八人いたでしょうか。みんな私たちに背中を向けているのです。私たちを真正面から見ているのは、そのママさんだけ。しかも、ステージはそのお店の玄関の扉の前なのです。私たちが漫才をやっている最中にお客さんが入ってきたりするので。その度に、私たちも漫才をやめ、「いらっしやいませ」と声をかけ、お客さんが通れるように端のほうにどいてやるのです。情けないような、複雑な気持ちで漫才をやったのを覚えています。

どれもこれも、私にとっては根本的に、そのときは確かに困ってしまっただけですが、非常に楽しい仕事でした。そして、今から思えば、そういう仕事の中で私自身がずいぶん鍛えられ、たたき上げられたような気がします。

私からすれば「芸が汚れる」なんていうのは、とんでもない話です。ひよっとして、私の本当の師匠は、こういう仕事を逃げないでやってきた、そういう事実と経験じゃないかと思えてしまうぐらいです。

しかし最近のは、はっきり言ってあなたという仕事とだんだん疎遠になってきています。それが、非常に寂しいんです。私自身が昔やっていたグループというものがなくなり、ネタというものを持たなくなっただというところもあるのですが、景気の低迷によって、あなたという仕事の絶対本数も減ってきています。今ではときどき、忘れた頃にどこかのイベントの司会をちょこつとやるぐらいのものです。しかし、私はこの世界にいる限り、あなたという仕事と縁を切りたくないと考えています。他の人があなたという仕事をどんなふうに思い、どんなふうに考えようが、私はお笑いの人間として、あなたという仕事にまだまだ魅力をいっばいに感じています。露出があって、あなたという仕事が入ってくるという根本的な図式がありますから、あなたという仕事ばかりを追いかけるわけにはいきませんが、私はなんとかしてこれからも、あなたという仕事をどんどんやっていきたいと思っています。そして、そういう状況をなんとかして作っていきたいと考えております。

拝啓「営業という仕事」様、待っててください。必ずまた一緒に仕事をやりましょう。そして、あとから笑える話をまたいっばい作っていきましょう。私はあなたという仕事が大好きです。仕事であり

ながら、なぜか私に旅を感じさせてくれる、あなたという仕事が大好きです。また、たくさんあなたという仕事ができる状況がくることを私は心から望んでいます。

待っててください。なんとかしてそういう状況を作ってみせます。それでは……

私の大好きな、あなたという仕事へ。

この業界ではたぶん数少ないであろう

あなたのファンより